漁業者が取り組むガラモ場再生について

ガラモ場は、水産生物の産卵場所や幼稚仔魚の生息場所、光合成による二酸化炭素の吸収など重要な役割を担っていますが、高度経済成長期の干拓や埋立等により減少し、現在、回復傾向にありません。

そこで水産研究所では、ガラモの一種であるアカモクに注目し、漁業関係者が実施できる再生手法をまとめた「ガラモ場再生マニュアル」を作成したことを以前に紹介しました（R8.6.1「ガラモ場再生マニュアルについて」）。今回は、その具体的な取組の一つである「適地選定」について、今年度から笠岡地区で始まった事例を紹介します。

まず、関係者でガラモ場を再生したい場所を数か所選定し、5 月末に人工的にアカモクを着生させたコンクリートブロックの基質を投入しました（写真１）。投入時の基質には１つあたり長さ約１～2㎝の芽が1,000本程度付着しており、投入後、定期的に生長と生残を確認しました。

基質投入から約 1 か月後に確認したところ、芽の長さが約 4～5 ㎝で芽数が 400～500 本程度となった場所もあれば、生長が見られず数も 30 本程度まで大きく減少した場所がありました（写真２）。ガラモの主な減少要因として考えられる食害と浮泥の影響を観察したところ、食害の痕跡は全体的にわずかで、浮泥が多く堆積している場所ほど芽数が少ない結果となりました。約 2 か月後には、芽の長さが長いもので約 7 ㎝、芽数が多くて 200 本程度になり、食害の影響を強く受けた場所や浮泥が多く堆積した場所が確認されました。約 3 か月後には、芽の長さが長いもので約 10 ㎝、芽数が多くて 60 本程度まで減少しました。今回も食害と浮泥の影響がみられる場所が確認され、順調と考えていた場所でも芽数が大きく減少していました（写真３、４）。

これまでの結果から、場所により発生時期や影響の程度に差があるものの、全ての場所で食害と浮泥の影響があることが分かりました。なお、ガラモが繁茂する時期は水温が低下していく冬場のため、引き続き生長と生残、食害や浮泥の影響を確認する必要があります。これらの調査期間を通じて得られた結果から、食害を防ぐ囲い網の設置など、その場所に必要な対策を組み合わせてガラモ場の再生を目指していくこととなります。

この笠岡地区の取組が、ガラモ場再生の成功事例となるよう、漁業者とともに取り組みます。

（海面・内水面増殖研究室：池田）



写真１　基質投入の様子（左上：基質）

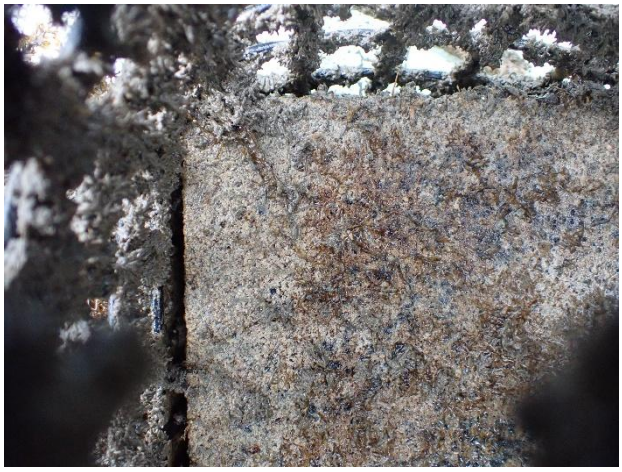



写真２　基質投入から約１か月後の状態（左側は順調に生長、右側は芽の多くが消失）

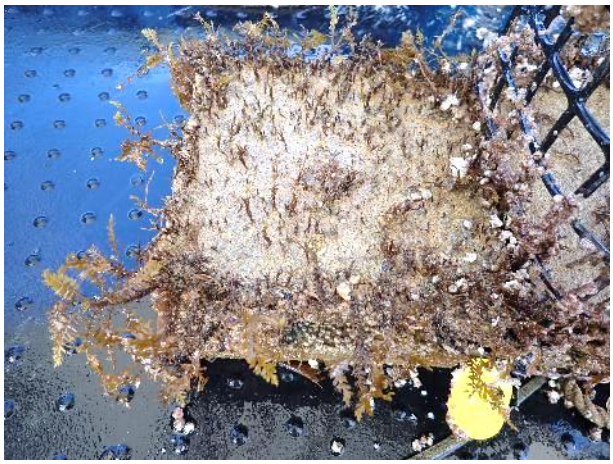



写真３　同じ投入場所での経過比較（左側：投入後約２か月後、右側：投入後約３か月後）




写真４　食害と浮泥の影響（左側は食害で根本しか残っていない、右側は浮泥で芽が消失）